宇野木 洋・松浦恒雄 編
中国二〇世紀文学を学ぶ人のために
〈世界思想社・二〇〇三年六月〉

まず「二〇世紀文学」という耳慣れない名称が目を引く本である。「近現代文学」ではなくこれを用いたことについては、編者が解説している。中国ではアヘン戦争・五四運動・中華人民共和国という政治的事件を近代・現代・当代の区切りとしており、日本語のイメージとはズレがある。そこであえて「中国二〇世紀文学という枠組みを設定」することによってその「文学動向をトータルに把握しよう」としたのである。本書と同じシリーズ中の『中国文学を学ぶ人のために』は、古典文学に関して、王朝によって断代する文学史を再考すべき時期に来ていると指摘する。文学と政治とが不可分とされる中国の文学に対して、政治的基準に基づく時期区分の問い直しや、それを越える連続性への志向は軌を一にするものである。

本書は三部構成となっている。

パート1「コンパクト・中国二〇世紀文学史」は二五年ごとに区切って概説する。パート2および付録の年表と相互に補足しあうという仕掛けとなっている。

パート2は各論で、標題は以下の通り。

二〇世紀前半の理論と制度：制度としての近現代文学
二〇世紀後半の理論と制度：「統治」の枠組から「解読」へ向けた模索の営為へ―対抗軸としての政治・欧米理論・コマーシャリズム
二〇世紀前半の詩：現代詩の生成―詩律の変遷とモダニズム
二〇世紀後半の詩：詩の復権―中国現代詩の沃野
二〇世紀前半の小説：〝救国〟と〝通俗〟の相克
二〇世紀後半の小説：「書く」ことの意味―二〇世紀後半の中国小説
二〇世紀の演劇：二〇世紀の京劇と梅蘭芳

パート3はトピックごとの短い文章で構成され、それぞれ日本、満洲、日本の統治下およびその後の台湾、日本の占領下にあった香港・上海、あるいは九〇年代にアメリカやヨーロッパで発表された作品を取り上げる。二〇世紀が中国にとって激動の百年だったことを示すとともに、日本との関係を改めて考えさせられる七篇が収録される。

写本から印刷出版への変化を古典は経験したが、二〇世紀は新聞、雑誌、映画、VCDと目覚しい媒体の増加を経験し、さらに現在も経験中である。それは作品の受容層を拡大変化させ、作家に新しい言葉を模索させ、作家と読者の関係を変化させる。本書中随所に見える劇的とも言える具体相は、現在への示唆にも富むものであることを最後に付け加えたい。　（松尾肇子）